就職に有利な学生は…

対人関係・勉学 意識高く

キャリア形成主体性カギ

労働政策研究・研修機構副主任研究員
下村　英雄

企業は採用の際に学業成績をあまり重視しないといわれることもあるが、電通育英会などの調査では、実際には対人関係が豊かで、勉強に熱心に取り組んだ学生が本命企業から内定を得ているという。調査に加わった独立行政法人、労働政策研究・研修機構キャリアガイダンス部門の下村英雄副主任研究員に寄稿してもらった。

電通育英会と京都大学は2007年秋、全国の大学3年生約1000人を対象に学生生活に関する調査を実施した。08年秋には前年調査の回答者に就職活動の結果を聞く追跡調査を行い、約600人から回答を得た。

積極的に交流

大学生の就職活動は「対人志向」と「勉学志向」の2つの側面から整理できる。調査では、第1志望の本命企業からうまく内定をとる学生は、学内外で様々な人と積極的に交流している実態が浮き彫りになった。

例えば、携帯電話の登録人数も多ければ、日ごろ、頻繁にメールをする人数も多い。さらには、親しい異性の友人がいる割合も高い。しかも、そうした学生は大学の勉強にもかなり熱心だ。

一方、第1志望の本命企業から内定をとれなかった学生は、本命企業内定組に比べると勉学志向が全般的に低い。①大学の授業に関する勉強時間が短い②基礎的な学力やスキルが身についたと感じていない③大学で学ぶ理由を「なんとなく」と回答する――などの傾向が強く、学業とは無関係なアルバイトの時間が多いのも特徴だ。

友少ない試験組

回答者の中には、試験を受けて将来の進路を決める学生がいる。大学院進学や公務員・教員などを目指す学生で、勉学志向は高いが、対人志向は低い。大学の勉強に費やす時間が長く、かつ大学の勉強が役立ったと考える学生が多い一方で、親友がいると答えた割合は約5割。他の学生の約7割を下回る。

大学生の就職活動に関する議論では、就職活動のルートに乗らない試験組はあまり注目されなかった。対人志向の低さが問題視されやすい学生群だが、高い勉学志向性で自らの進路を切り開く学生層ともいえる。

最も深刻な結果を示したのは、就職活動を行わなかった学生や就職活動を行ったが4年生の秋までに内定をとれなかった学生である。この学生層は、対人志向と勉学志向のどちらも低かった。

例えば、内定がとれなかった学生は、交友範囲が狭く、広げることに関心もない。そのためか同年配の異性と楽しく話ができるとは考えておらず、結果的に異性の親しい友人も少ない。また、就職活動を行わなかった学生は他の学生に比べてゲームに費やす時間が長いことも象徴的である。

調査結果を、対人志向と勉学志向の2軸上に整理したのが図である。これから、大学生の就職に向けたキャリア教育について、どのようなことが言えるだろうか。

まず対人志向は、就職活動に向かうか否かの境目になる。就職活動は人とのコミュニケーションを通じ自らの能力を表現することが求められる。そうした能力は学内外の様々な人とのやりとりで身につく。自ら幅広い対人関係を持とうとしない学生には、対人志向に焦点を当てたキャリア教育の取り組みが必要だ。

特に、試験組の学生たちの対人志向の低さは問題視すべきである。将来、研究者、公務員、教員のどの職業に就くとしても、対人志向は高い方が望ましい。試験組の学生は、対人志向を伸ばせば本命企業内定の学生にも変わりうる。本人の将来の選択肢を増やす意味でも、そうした手だては必要となろう。

次に勉学志向は、大学生のキャリア教育全般で、従来以上に重視されるべきである。本命企業に内定をとる学生とは、裏返せば企業に選抜されやすい学生でもある。今回の調査では、大学できちんと勉強した学生が企業に選抜されやすいことが明らかになった。

授業にまじめに出席し、必要な知識や情報を入手し、何らかの形で成果に結びつける。これこそが情報化社会・知識社会における働き方である。大学の授業で行うような抽象的な概念や情報・知識を取り扱うスキルが企業でも求められている。キャリア教育のどのような取り組みも、最終的に大学で行う普段の授業・学習に収れんするように考える必要がある。

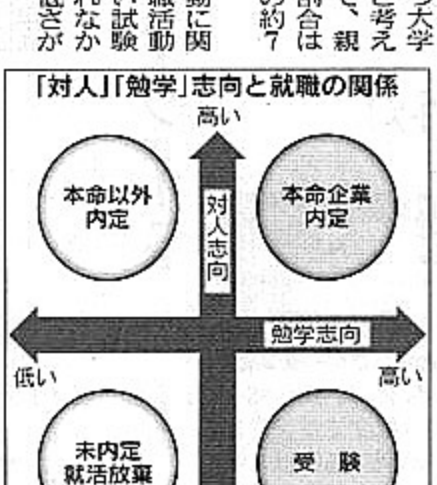
しかし、やはり最終的に問題となるのは、対人志向と勉学志向の両面が低い学生たちである。このような学生に対して、現在、大学ではキャリアセンターを整備し、キャリア関連の授業科目を増やし、手厚いキャリア教育を提供している。

一方で、キャリア教育を充実させるほど、学生の最も根本的なモチベーションへの働きかけは難しくなることも明らかになりつつある。どれほど手を尽くし、仕組みを整えても、第一歩は本人にしか踏み出せない。キャリア教育には、きりきりのところで、どうしても素朴な精神論が必要となる領域がある。

自ら未来開く

とはいえ、ここでも鍵となるのは勉学志向だ。大学で勉強することは自分1人で始められる。授業に出て勉学に打ち込めば、同じく勉学に打ち込む学生と友達になる可能性も高い。大学生にとって、勉強に打ち込み、友達をつくる以上に簡単なことはない。学生生活でのちょっとした決心から輝かしい未来が開かれるのも大学生のキャリア教育では真実と思われる。

本稿の内容も含めた「大学生研究フォーラム2009」が7月25、26両日、京都大学で行われる。様々な観点から幅広く議論を行う予定である。



教育

最新技術の活用

はかなり普及しており、製品の完成度も高く、学校や個々の教室に導入が可能な価格になってきた。携帯型メモリーの紛失や盗難が後を絶たない現在、情報保護ツールの整備も欠かせない。保護者への迅速で豊富な学校情報の提供もますます重要となってきた。

特に興味を持ったのが電子出

本的内容を指導したら自ら学ぶ力を身につけることが重要である。それには知識や情報を知るだけでなく、課題意識を持ち、自律的に必要な知識などを探し当て、編集する力の育成が求められる。最新技術を眺めながら、教育と学習の在り方を根本的に再考する時代が目の前に来ていると実感した。

（玉川大学教授　小松郁夫）